

4. 境界児の早期発見のための健診項目の検討

— 1歳6ヵ月齢のチェック項目について —

落合 幸勝* 廿楽 重信*

目 的

MBDやCLUMSY CHILD, 発達性言語発達遅滞児, 境界知能児などのいわゆる境界児の早期発見のために早期診断するため, 1歳6ヵ月月齢時の健康診査のチェック項目を作成し, その妥当性を検討することを目的とする。

対象及び方法

対象は当センターを1歳以下で初診し, Vojtaの提唱する危険因子を持ち発達遅滞のある危険児の内, 5歳以上まで経過追跡し得た102名を対象とした。初診時明らかな脳性麻痺や精神薄弱, てんかん等の脳損傷児は除いた。初診時の平均年齢は6ヵ月で最年少児は1ヵ月, 最年長児は1歳であった。調査時, 平均年齢は6歳10ヵ月で, 最年少児は5歳1ヵ月, 最年長児は12歳10ヵ月であった。性別は男55名, 女47名であった。調査時診断名は正常児(グループA)20名, 境界児(グループB)49名, 脳性麻痺や精神薄弱, てんかん等の脳損傷児(グループC)33名であった。方法は廿楽の述べた境界児のチェック項目の内, 1歳6ヵ月時の項目を基礎として, 下記の6項目のチェックリストを作成し, これら102名の対象児の1歳6ヵ月時点のチェック項目陽性率について検討した。チェック項目は次の通

りである。

1. 伝い歩きの段階で独歩出来ぬ, 或いは独歩出来ても歩行の仕方が尖足傾向や失調歩行等を呈する児
2. 筋トーンス低下があり発達の遅れがみられる児
3. 有意な始語がない児
4. 行動過多がみられ自閉的傾向のある児
5. 聴力障害や視力障害の疑われる児
6. 脳波やCTで脳損傷を示す異常があり, 発達の遅れがみられる児

これら6項目のうちチェック数の妥当性を欠く視聴覚障害の存在, 第5項目を除いた5つの項目を説明変数として, 調査時診断名を目的変数として, 数量化分析2類(判別分析)を用いて分析した。

結 果

各チェック項目と診断名別のグループとの関係は表1に示す通りである。1名当りのチェック項目陽性数はAは0.8個, Bは1.8個, Cは3.2個であった。図1は数量化分析2類でえられた5つのチェック項目のカテゴリーウエイト(判別関数)をベクトルとして表したものである(相関比0.501)。本分析の結果からは1歳6ヵ月時に見られる発達のキー項目, 始語(第3項目),

*北療育医療センター小児科

脳損傷の所見(第6項目)、処女歩行(第1項目)が診断名を判別するのに高いウェイトを示した。第4項目も同じ様に各グループは自閉症やその他の行動異常児を含まぬ為にウェイトが少ないと考えられた。

まとめ

危険児として乳児期から追跡し、危険因子、チェック項目の検討で境界児の早期発見が可能と考えられた。

表 1才6ヵ月齢における境界児の検討
—チェック項目別陽性者数—

調査時診断名 人数	正常児 20	境界児 49	脳損傷児 33
チェック項目			
1	3	34	27
2	3	10	17
3	1	7	21
4	1	7	8
5	0	28	32
6	7	3	0
1人当りのチェック項目 陽性数の平均値	0.8	1.8	3.2

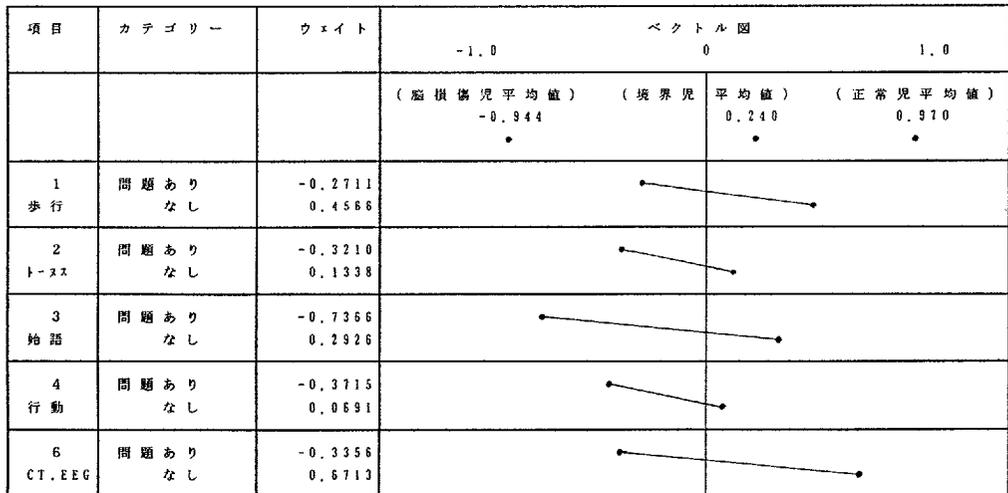
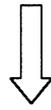


図 チェック項目の判断分析



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

MBD や CLUMSY CHILD, 発達性言語発達遅滞児, 境界知能児などのいわゆる境界児の早期発見のためを早期診断するため, 1 歳 6 ヶ月月齢時の健康診査のチェック項目を作成し, その妥当性を検討することを目的とする。